



第一章

言いたくない ことの部

沖縄県嘉手納村屋良小学校 在学中

■照屋 美佐枝

日本人へ

私達が日本人になる
みんな手をあけていわう
それかよくわからない
日本人もよくしっているんろう
もと私達が
日本人たったことを

どろどろつとした何かが、いつも私たちの内部にはある。それは、たまたまという風にしか言葉にならない。そして、たまたま言葉になったとき、その内容は、発言した個人の存在にほとんどかわりなく、大へんな重量をもった独自の姿を持つ。
「言いたくないこと」というが、実は、もつとも言われねばならないこととして、私たちはこの章に耳を傾ける。

言いたくないことの二部

■北野 晶子

何があほらしいといって

これ程、あほらしいことあるでしょうか

お父つつあんのお金で

プロレタリア文学、そろえるのです

「ゲバラ日記」も「反戦詩集」も「レーニン伝」も

時には「チビくろさんば」も

お父つつあんがブルジョワで

その子がプロレタリアなのです

お父つつあんが

会社の組合員に自己批判せまられて

その子は叫ぶのです

「お父つつあんを責めないでくれ」

4・28のシユプレッヒコール 思い出しつつ

何が狂つてると言つて

これ程、狂つてること あるでしょうか

放つておいたら 殺されてしまう

平和を望んだから行進したら

簡単に抹殺される

大人たちは狂つた振りをし

生活に追われてるからつて

だまされた振りして

デモの日の子供の後姿、見送るのです

先生たちは先生よばわりされるのを

なぜか 恐がつて

専門家のくせに専門家であることを

否定するのです

女の子たちはだまされ続けて

「革命」や「思想」をうたにすると

すぐ 泣きそうになつて 興奮するので

自分ときたら 互にだましあつて

いるのに

男の子たちもだまされ続けて

やけっぱちのギターの音で

女の子たち だましたつもりです

だけど 何が 狂つてるといつて

あいつ 三泊四日のつもりが

十三泊十四日

五日目には もうインターさえ

うたえなかつたんだ

だけど あの先生 何かの拍子に

ひどく驚いて 受験生前にして

悲しい人生の話をする

何も始まつてはいない

けれど 放つておいたら

何かが 始まりそうだ

何も終つてはいない

けれど 放つておいたら

何もかも 終つてしまう

放つておいたら

時代が何もかも

包み隠してしまう

逃亡しよう

■ 佐久間 章孔

逃げて逃げて逃げて逃げて逃げてまくれ

やれ逃亡だそら脱走だ

ホイサツサ コラサツサ

何から逃げる どこまで逃げる どこへ行きつく
そんなこたあ脚で考えしやんせ

ネオンまばらな裏通り

朝焼けきれいな海岸通り

あの娘かわいや花屋の通り

どこまで続くのとうぼう通り

なぜかだあれも追ってはこないって？

なにを言いやがるこのものの見事な阿呆めが！

追ってこないから逃げるんだ

追って来たら止まるんだ

追わせるために逃げるんだ

ホイサツサ コラサツサ

それでもだあれも追ってはこないから

とうとう着いちやった生協通り

農協通りもありんすよ

またまた逃げだすホイサツサ あコラサツサ



男はつらいよ

男はつらいよ

セガレの弥助より

こんりんざい帰る事はネエだろうと
心に決めてから三年
そぞろ故郷の恋しく思い出さ
れる今日この頃でゴザンス
ゲバ棒片手の闘争渡世
しよせんヤクザなこの極道息子のアッシにや
やつぱりこうした暮らしが一番向いて
いるんだとテメエに言い聞かせているんですが
男と生まれて二十三年
悲しくつらい事も多オゴザンスおふくろさん！

男はつらいよ

男はつらいよ

戦争がおつぱじまったら鉄砲かついで兵隊サンに
世の中が平和な時や家族を養うために黒力バンを下
げ上役のゴキゲンをとりながら会社勤めに
何時になつても他人の為に精一杯働らいて命をはり
減らしては死んで行くなんて……
寅さん！健さん！オフクロさん！
“男”って言葉は鎖の様に重たいねエ
今の御時勢に逆つて生きようとするんなら
隠居か八九三か闘争か？
イヤな渡世でござんすネエ！

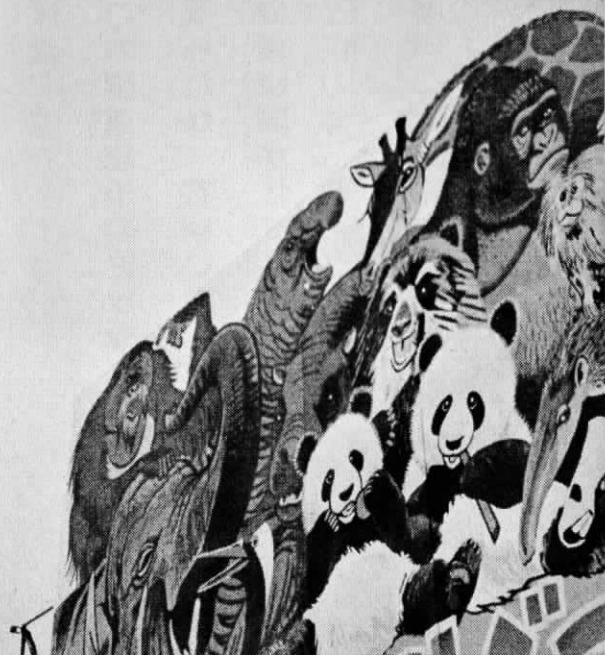
『雨にもまけず』

■原作 宮沢賢治
■変詩 榊川 濁

雨にもまけず
風にもまけず
帝国主義にも軍国主義にもまはぬ
強い思想と意志をもち
私有欲はなく
決してヒヨらず
いつも何かの本を読んでいる
一日にハイライト一箱と
学園食堂のうどんを食い
あらゆることを
自分の問題として受けとめ
よく見聞きしわかり
そして忘れず

体育館の二階の小さな部屋にいて
東にデモあれば
行つて機動隊に石を投げ
西（西門）に検問体制あれば
ヘイを乗り越えて学内に入り
北（梅田）でクラブの忘年会あれば
野球ケンでパンツ一枚になり
南に合同読書会あれば
行つてカッコイイことを言う
封鎖解除の時は涙を流し
反革命者には正当な暴力をふるう
後期試験もどこ吹く風で
せつせと「正午」の原稿を書き
パチンコもマージャンもせず
いつも文芸部の仕事をし
女の子から
「すてき」と言われる
そういう人間に
私はなりたい。

大阪工業大学文芸部三年に
45年12月発行



デモ ゴゴ ロクジ

■岩永和朗

ゴゴ ロクジ

なんか おこってるんやな

ゴゴ ロクジ

ぼくはデモのなか、デモってる

アンポ ファンサイ

ゴゴ ロクジ

みようにノドにつかえる ファンサイ

わからんのやな、ほんと

ゴゴ ロクジ

いつもは なにしてたろう

で、きょうはなににきたんだろう

ゴゴ ロクジ

わからんのやな、ほんと

アホちゃうか

こんなメンドウなこと

ゴゴ ロクジ

あるいてる ヒヨコヒヨコ

ときにノロノロ

いやそうにカケアシ、どこまでいくの

ゴゴ ロクジ

あんなに帰りがつてたウチに

ぼくは

くるりと背をむけた

ゴゴ ロクジ

みんなどーしてやろな

テレビみて、けたけた笑って……

ゴゴ ロクジ

アンポも

それがどうしたってんだ

それから なんとか勝利も

かってにしゃがれ

ゴゴ ロクジ

ぼくのよこの

手をくんでいるひと あんた だれや?

あんたの 手のぬくもり

あったかい手

ゴゴ ロクジ

それきりしか しらん

でも 知る、とはどういうことなんだろう

会社員であろうと、花屋であろうと、学生で

あろうと、オバちゃんであろうと、エライ

さんであろうと、

ゴゴ ロクジ

そのとき みんなおんなじ

だれであろうと

それは 機動隊さんのじかんでもある

命令

デモ規制

ケイビ

ゴゴ ロクジ

それは いったいなんでしょう

こわいオッサンがたよ

そのとき なにすんですか?

そのじかん あなたはなんでしょう?

ゴゴ ロクジ

なんて 機動隊

なんて ケイボウ

なんて ジュラルミンたて

なんて ロボットおめん

ゴゴ ロクジ

ふしぎなふしぎなひたとみずおとちぢむ

みずうみにコンニャクのまくを張った

この目たち

この目たちのさびしさは
ぼくの目のものなのだ

ゴゴ ロクジ

きずぐちおさえるユビ、ユビ、ユビ、ユビ
ユビのうすみぞにうたりだす血がたまり

つかれた皮のまっ暗い空気

砂、すなほこりが死んでいる

ゴゴ ロクジ

コーラのかんばん

が舌をだして アワをはいている

夕焼のなかで

ゴゴ ロクジ

あかあおにそまりだしたまちの人びとの顔
ネオンにおわれて さきをいそぐ

ぼくも

ゴゴロクジ、はよ、おわらんかいなあ

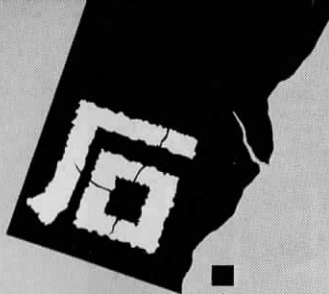
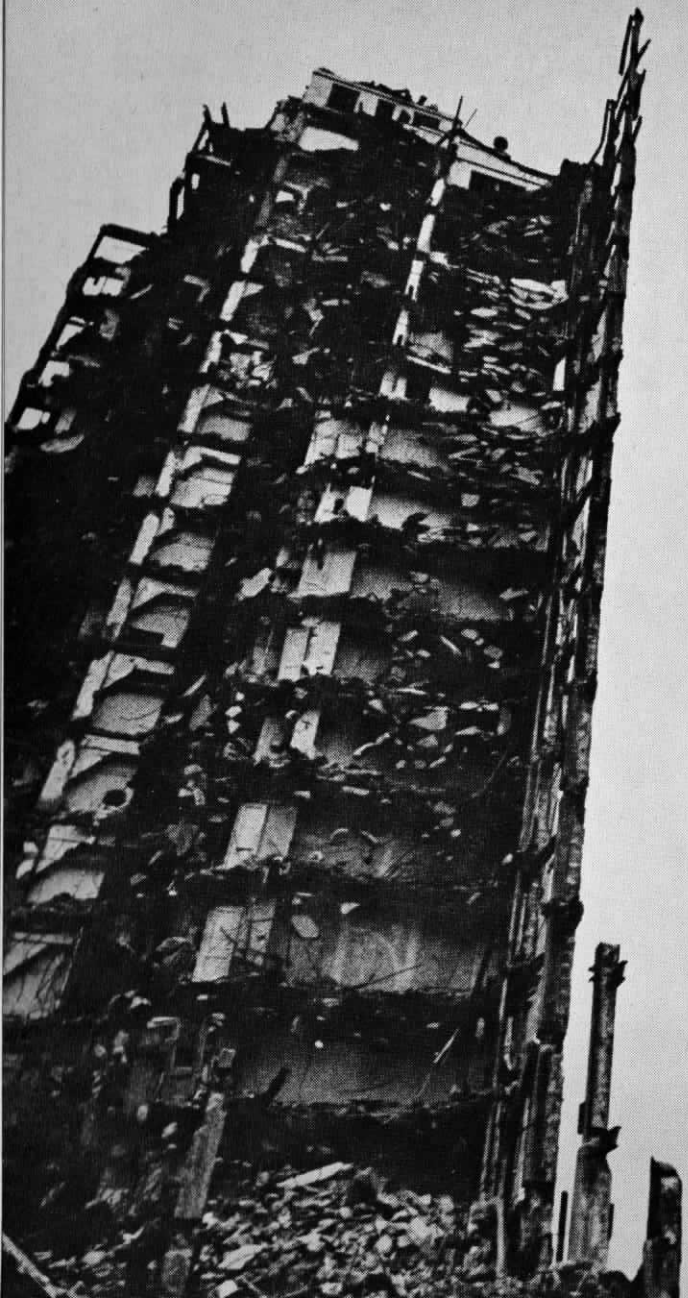
ゴゴロクジ、でも だれかを知った

ゴゴロクジ、消えない記憶だ

やせのおおぐい

■土呂 耕

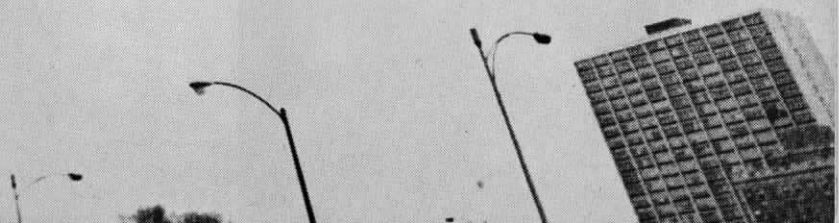
獺は夢をくい
僕は現をくい
革命は言葉をくい



■ 山口 昭治

たわ言には飽きた 叫びにも飽きた
ぼくに欲しいのは一個の石だ
手のひらにちようど一握りできる
温かくも冷たくもあり
黒くも青くも白くもある
一個でさまざまにかわる石だ
啞てつんぼの石だ！

そんなことを考えながら
反戦デモで賑わう街を歩いていたら
手のひらにちようど一握りできる
コンクリートの破片がすっとんできて
したたかばくの上脛を打ったのだ
するめの脚のような日本列島の
一九六九年秋のできごとである



そるばつてん海に行きたかと

■津森 太郎

子どもは

つれてもくえぬ魚ぼつり

こつそりと海へ行くとです

水銀をのみこんどる魚は

猫にもやれんけん

にがしてやるとです

おるがおとつあんば殺した海 魚

おるがねえちゃんば殺した魚 海

おどんたちが目をとりあげ

おどんたちが手足を中風のごつした海 魚

そるばつてん

おれも行きたか、と

おとつあんの体にしみこんでいた匂いのする

ねえやんの肌着にしみこんでいた匂いのする

あん海へ

行つてみたか

あのこどもたちのこつ

おれも漁師の息子だけん

あすこてもええけん舟ばこいじ

あすこてもええけん魚ばつて

腕ばみぎやち

できるなら

水銀の流れこまぬ遠い海へ行きたか、と

でも目が見えん

立つとぐらぐら真黒か世界がまわつて

立つてもおれん

水銀をくわされた頭がぐらぐら

かたむいち くちおしか

なんにもできぬとですばい

なんにもみることができんとですばい

ばってん 見えとる
チッソどんのけたけた笑い……

おれの体は涙のかたちばしとるでしよう
おれの体はいかりのかたちばしとるでしよう

熊本市地方総合誌「あそ」第一号

羊山公園

■大崎 憲二

街には かわいた星と
惰眠にまみれた白い廂があつた

石灰の花びらが 降り注ぐ
熱い物陰から

一匹の犬が

桃色の舌をさらしてあらわれた

皮膚は剥げ網膜は白く垂れている

太陽が その動物の

肩甲骨の上に小さくけぶり

灰塵は気管をおそつた

人影はなく

武甲山はそびえる

企業の煙突だけが 熱い灰を吹き上げ

荒々しい脈搏をうつ

秩父事件の碑の前で ぼくは

憲兵に立ち向かつた

つるはしの男たちの

炎の物語を読み

声帯を閉じた

「はく」第四号

時代轉換の地揺れ

■小田 天界

皇居参賀が前年より四千人増えて

十万余千人だったと

NHKは防弾ガラス越しの

手振り姿を大写ししていた

やがて画面は

“天皇を撃て！”と横腹に張り出した

パチンコ男の宣伝カーに変わり

その車へ投石した学生の

逮捕を伝えた

“天皇を撃て！”などと

五十年前に叫びでもしたら

確実に死刑にされただろう

山口与曾人君は

「大日本帝国大法」と書いて

獄中で絞め殺された

三十年前にだって

“天皇を撃て！”なんて叫んだら

いのちは確実に断たれただろう

それから敗戦があり

帝国憲法が民主憲法に変わってから

パチンコ男は

実際に危害を加えなかったけれど

傷害罪で一年半もの 実刑が課された

が、それから三年のあいだに

“天皇を撃て！”と大書した宣伝カーが

皇居前広場を大威張りで

訴え叫んでのし歩いても機動隊は

投石男から安全を守ってくれている！

パチンコ男が

“天皇を撃て！”と命じたのは

“ヤマサキ”という英霊だ

ニューギニアの戦場で

パチンコ男と一緒に悪戦苦闘して

死んだ戦友の一人だ

“ヤマサキ”とおなじ状況で

戦場に散った英霊は

二百何十万人もいる

“ヤマサキ”同様に

“天皇を撃て！”と命じられたら

靖国神社も大揺れに揺れて

日本全土に大地震が起きやせんか！

いのち未練げに

政治轉換作業をサボっている

半老人がおりはしても

時代轉換の地揺れは

確実な足取りで

“言論の自由”の庇護をうけながら

一九七三年初頭を

ワッサワッサ

ゆさぶっていたわ！

——英霊たちの燃える遺命に先導されながらだ

マンザイ

■上原 章祐

何故か、白け切ってしまった後に、お祭はやって来るものだ。あとのまつりたあよく云ったものだ。泪流して泣く人よりも、催涙毒ガス撃つ人キライと云うのは、60年代末期症のひとつであろし、この孤独でみじめな大後退戦を行なうのには、そんな感傷は通用はしないのである。

中央制圧的・動員の・幻想をのりこえなければ……と云いながら、俺は街の隅っこに追いつめられている。日本帝国は、オキナワを、中央に結びつけた。と云うことは、才目出度「公民」の懼れの島を、辺境、さびれて行く俺たちの島にして行つた。沖縄復讐論・奪還論・独立論破れたり。あとは、この低国、日低は、均一化された風景を造って行くのだろしと思つてみると、

に、ある種の生な斗いをみせた。反米愛国を唱えながら、何等なし得なかつた「前衛」。逆もどりする。否、コエてる日本帝国、への怨念を「オキナワじゃ、ヤツトルナラ」と云うことで幾分代償させていた所もある様だ。安易な同情とそのウラのゴウマンさ、それだからこそ、日低「公民」は少しも超えちゃいない。超えちゃいないから、ニコポンで「返還」決まっても何かなんだかわからないで、TVのインタビュに答えて曰く「イイコトデスネ」。「ドル」305円、イイトなか。

かくして、本日（これを書いている五月十五日）より、日低「公民」一同、雁首そろえてアジア革命人民と対峙した。オキナワはつぶされた。

「開発」も「買収」もあるだろうし、沖縄人民は圧迫を受ける。そして、ボケリットしてる俺らも、全く同じようにまずしくなつちまうのである。オキナワを手に入れ、日低の南進への路は、極めてトビキリに、悪魔的に決定された。オタク資本ヨ、それでも、ガムシヤラに島を喰い荒らす資本ヨ。反米斗争遺産は、

まさしく、そんな甘い挫折的感慨など屁のカッパ、亜細亜の被抑圧人民の斗争は、まさかそんなことを許してはいない。だもんで、オキナワの矛盾、反革命のキーストーンから、ますます日低はワルノリ、大ワルノリにひきずり込まれてしまうのである。こんなことポヤイても仕方がないのだけれどタイムゼイアーチェインジング、我日低「公民」一同、オキナワ、本土「革新」勢を破って、まんまと、自己拡大の拠点・帝国主权的侵略への踏み石を手に入れたつもりなのだろうけど、一寸先は、革命の地、地獄の一丁目、奈落を覗くアンヴィヴァレンツになつちまうのである。「復帰はいいが、沖縄の人の本当に望むように……」とは、俺を含めて、「本土」（実は東京なんて所位のもの）の「国民」はヌケヌケと云うものだ。実際、そんなこと云う奴は、どんな風なことを考えてるのかしらん。こんなん？「核も基地もない島・本土みたいに2DKにも住めない島・工場じゃイビラれる島・みんなアキラメていて、あばれるのは赤軍派だけの島」。沖縄人民の反米斗争は、戦後、城内平和の中で屈服した「国民」

あと十年位、食いつぶせるであろう「革新」ヨ。五・一五、ここでハッキリと、俺らの噛みしめることは、俺らは、今、おしつぶされていることだ。後退である。まだ見ぬオキナワへ、俺は行けないで、資本と、自衛隊とキ動隊が行く。今、ホイホイと、俺をふみつけて行く人奴々お前等の一寸先は地獄だ。沖縄解放日日本解放を出来なかつた俺らは後退を余儀なくされている。とても残念です。

日低「公民」よ、アジアへはまり込んでブットバサレルのだ、もうあととどろ不可能か、ザマアミロ。俺らは、お前らをウラ切るのだ。

タノシイタノシイ、フッキバンザイ

死ね!! 死ね!!

みんな地獄へ
おちろ!!

帰路

——大会の日に——

■藤田 励治

おまえは 虫だ という

おれは 虫だ

だが

偽装の果実に巢喰う

そんな虫ではない

きみらは集まり

組織を わがもの顔にする

組織を買い

不渡りを出す

ぬけぬけと そんな経理を 指示を

このおれは認めるわけにはいかない

おまえは草だという

おれは 草だ

だが きみらのように

庭や公園を色どる

そんなやつではない

ふるさとの屋根をおおう

ペンペン草だ

おれは鋭く

きみらが売った果実を求める

激しい口調で

きみらが植えた花に反論する

偽装を、毒草を、売りつけてはいけな

『俺は栗の木だ。俺はいがだ。俺は碎ける。俺は

弾だ。俺は河だ。俺は流れる。俺は山だ。俺は崩

れる。俺はネズミ。俺はベストだ。俺はゴミだ。』

俺は鳥だ。俺は吹雪。空を襲う。かけ降りる大臣。

俺という哀しい奴。それでも俺には目と耳がある。

俺は人かもしれない』

そんなおれが 羊のように

きみらとむき合っている

おれはやっぱり虫だ 草だ

広小路を曲がると小さな村

赤いネオンが標灯みたいだ

疲れた僕が暗号兵だったことも

妻の乳房がふくよかだったことも

いまは誰も知らない

きみたちとおれについて

大会の運動方針について

これからの斗いについて

黒い霧について ベトナム戦争について

国会解散について 総選挙について

おれは考えている

考えながら歩いている

アスファルトを踏む軍靴の音

近づいてくる

おれを流れる遠い河

沈んだ骨が

碎けた武器が

カラカラとぶれ合っている

電光板はきらびやかだ

いつせいに森の方へ 光っている

だが この街も 村も

おれのもの おれたちのもの